

沖縄今帰仁方言のアクセント体系

崎村, 弘文
鹿児島大学助教授

<https://doi.org/10.15017/10481>

出版情報 : 文献探究. 14, pp.19-27, 1984-06-15. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

沖繩今帰仁方言のアクセント体系

崎 村 弘 文

本稿において筆者は、沖繩県^{ウチナー}国頭郡^{クニガタ}今帰仁村^{イマキニ}字与那嶺^{ユナミネ}方言のアクセント（厳密にはトーン、以下同様）について考察し、それがいわゆる n 型体系を持つことを明らかにしたいと思う。

筆者は、この数年、琉球諸方言アクセントについての考察を重ね、その多くが鹿児島方言や長崎方言のそれと同様 n 型体系を持つ旨、明らかにして来た。また、これまで詳細な実態報告の成されていなかった方言についても、漸次調査を加えて同様の事実を指摘せんとしていたのであるが、その間、仲宗根政善氏の大著『沖繩今帰仁方言辞典』が刊行されて、沖繩本島中部方言のアクセントの実態を、空前の詳しきで知ることができるようになった。

同書には、今帰仁村字与那嶺方言において 1～7 モーラの語に実に 71 種¹⁾もの調値が認められる旨、示されており、余人の成し難い貴重な調査報告となっている。これにつき、筆者の分析したところでは、同方言はシラビームを分節単位とする三型アクセントの方言であり、やはり、他の琉球諸方言と同様、n 型アクセント体系を持つことが明らかとなった。以下にその次第を示し、琉球諸方言の n 型性云々の論議をより確かなものとするよすがとしたいと思うのである。

まず、71 種の調値を、モーラ単位の表記からシラビーム単位のそれへ改めて示せば、次のようになる（シラビームの下の線は、該シラビームが長いことを示す。数字は、同書 651 頁～661 頁の「アクセントの型と語例」に示された〈類別〉のそれ）。

- (1) ① (2) ② (3) ③ (4) ④ (5) ⑤ (6) ⑥多、⑦ (7) ⑧ (8) ⑨ (9) ⑩⑪⑫、⑬⑭、⑮ (10) ⑯、⑰⑱⑲、⑳㉑ (11) ㉒⑳、㉓㉔多、㉕㉖、㉗㉘多 (12) ㉙㉚ (13) ㉛㉜ (14) ㉝㉞ (15) ㉟㊱、㊲㊳ (16) ㊴㊵ (17) ㊶㊷ (18) ㊸㊹多、㊺㊻ (19) ㊼㊽㊾、㊿㊻㊼、㊽㊾㊿ (20) - (21) ㊿㊻㊼、㊽㊾㊿ (22) ㊿㊻㊼㊽多、㊿㊻㊼㊽多 (23) ㊿㊻㊼㊽、㊿㊻㊼㊽ (24) ㊿㊻㊼㊽ (25) ㊿㊻㊼㊽㊾ (26) ㊿㊻㊼㊽㊾ (27) ㊿㊻㊼㊽㊾ (28) ㊿㊻㊼㊽㊾ (29) ㊿㊻㊼㊽㊾ (30) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿ (31) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿多 (32) ㊿㊻㊼㊽㊾ (33) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (34) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (35) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (36) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿多、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (37) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (38) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (39) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (40) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿多、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (41) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (42) - (43) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (44) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (45) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (46) - (47) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (48) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (49) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (50) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (51) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (52) ㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿多、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿、㊿㊻㊼㊽㊾㊿㊿ (53)

) ○ ○ ○ ● (54) ● ○ ○ ○ ○、○ ○ ○ ○ (55) - (56) ○ ● ○ ○ ○、○ ● ○ ○ ○、○ ● ○ ○ ○ (57) ○ ○ ● ○ ○ (58) - (59) - (60) ○ ○ ○ ○ ● (61) ● ● ● ● ●、● ● ● ● ● (62) ● ● ● ● ○、● ● ● ● ○ (63) ● ● ● ● ○、● ● ● ● ○ (64) - (65) ● ○ ○ ○ (66) ● ○ ○ ○、○ ○ ○ ○ (67) ○ ● ● ● ● ●、○ ● ● ● ● ● (68) ○ ● ● ● ● ○ (69) ○ ● ● ● ● ○ (70) - (71) ○ ● ○ ○ ○ ○、○ ● ○ ○ ○ ○ (72) ○ ● ● ● (73) ○ ● ● ● ● ○、○ ● ● ● ● (74) ○ ● ● ● ○、○ ○ ● ● ● ○、○ ○ ● ● ● ○ (75) ○ ● ● ● ○ (76) - (77) ○ ○ ● ● ○、○ ○ ● ● ● ○ (78) ○ ○ ○ ● ● ● ○、○ ○ ○ ● ● ○ (79) - (80) ○ ○ ○ ● ○、○ ○ ○ ● ● ○ (81) -

これを生成アクセント論的に処理すれば、次のようになる(調値の前の数字は、上記の<類別>)。

シラビ- <u>A</u> 数	調 類	調 値	対応する名義抄式アクセントの調類
1	a b c	3 ● 2 <u>○</u> —	1 モーラ名詞 1類・2類 1 モーラ名詞 3類 —
2	a b c	8 ○ ● 6 ○ <u>○</u> 4 ● <u>○</u>	2 モーラ名詞 1類・2類 (5 ○ <u>○</u> 、3 ● †) 2 モーラ四段活用動詞 1類 (● †) 2 モーラ名詞 3類 (2 <u>○</u> †) 2 モーラ名詞 4類・5類の一部 2 モーラ四段活用動詞 2類 (2 <u>○</u> †) 2 モーラ名詞 4類・5類 (1 <u>○</u> †) 2 モーラ名詞 3類の一部
3	a b c	1 7 ○ ● ○ (○ ● ●) 2 9 ○ ● <u>○</u> 1 2 ○ ○ ● 2 2 ○ ○ <u>○</u> (● ○ ○)	3 モーラ名詞形類ほか (1 8 ○ ● †) 3 モーラ四段活用動詞 1類 (2 5 ● ● <u>○</u> 、2 8 ○ ● ●、1 4 ● <u>○</u> †)・同一 段活用動詞 1類 (1 6 ○ ● ●、1 4 ● <u>○</u> †)・3 モーラ形容詞 1類 (1 4 ● <u>○</u> †、1 3 ● ● †) 3 モーラ名詞頭類・兎類ほか (3 2 ○ ○ ●、6 <u>○</u> ● †、1 8 ○ ○ ●) 3 モーラ四段活用動詞 2類 (1 1 ○ ○ <u>○</u> 、 <u>○</u> <u>○</u> †)・3 モーラ形容詞 2類 (1 1 <u>○</u> <u>○</u> †) 3 モーラ名詞 (7 ● ○ †) 3 モーラ四段活用動詞 3類 (1 5 ● ● <u>○</u> †)・3 モーラ形容詞 2類の一部 (1 5 ● ● †)

4	<p>a</p> <p>3 0 ○ ● ○ ○ (○ ● ● ●)</p> <p>4 5 ○ ● ● ●</p> <p>b</p> <p>5 3 ○ ○ ○ ●</p> <p>3 7 ○ ○ ○ ●</p> <p>c</p> <p>9 ● ○ ○ ○</p>	<p>4 モーラ名詞 (1 0 ○ ● ○ ○、3 1 ○ ● ● †、1 0 ○ ● ○ †、2 4 ● ● ● †)</p> <p>4 モーラ四段活用動詞 1 類 (2 5 ● ● ● †、2 9 ○ ● ● †、4 4 ○ ● ● ●)</p> <p>・ 同一段活用動詞 1 類 (2 9 ○ ● ● †)</p> <p>・ 4 モーラ形容詞 1 類 (4 0 ● ● ● †、4 1 ● ● ○ †、6 2 ● ● ● ●)</p> <p>4 モーラ名詞 (3 7 ○ ○ ○ ●、3 6 ○ ○ ● ○、○ ○ ● ○、1 1 ○ ○ ● ○、○ ● ○ †、○ ● †、5 2 ○ ○ ● ●、2 1 ○ ● ○ †)</p> <p>4 モーラ四段活用動詞 2 類 (2 2 ○ ○ ○ ● †、2 1 ○ ○ ● ○、○ ● ○ †)</p> <p>・ 同一段活用動詞 2 類 (2 2 ○ ○ ● †)</p> <p>・ 4 モーラ形容詞 2 類 (2 1 ○ ○ ● ○、5 0 ○ ● ○ †)</p> <p>4 モーラ名詞 (3 3 ● ○ ○ ○、9 ● ○ ○ ○ †、1 9 ● ○ ○ †、● ○ ○ †)</p> <p>4 モーラ動詞 (1 5 ● ○ ○ †、1 9 ● ○ ○ †)</p>
5	<p>a</p> <p>(○ ● ○ ○ ○)</p> <p>(○ ● ● ● ●)</p> <p>6 8 ○ ● ● ● ●</p> <p>b</p> <p>(○ ○ ○ ● ●)</p> <p>8 0 ○ ○ ○ ● ●</p> <p>c</p> <p>3 3 ● ● ○ ○ ○</p>	<p>5 モーラ名詞 (7 1 ○ ● ○ ○ ○、4 7 ○ ● ○ ○ †、6 7 ○ ● ● ● ●、4 0 ● ● ● ○ †、4 4 ○ ● ● ● †、3 1 ○ ● ● †、3 9 ● ● ● †、4 9 ○ ● ● ● †、○ ● ● †、6 1 ● ● ● ● ●、6 2 ● ● ● ● ○)</p> <p>5 モーラ四段活用動詞 1 類 (6 2 ● ● ● ● †、4 9 ○ ○ ● ● †、○ ● ● †、3 1 ○ ● ● †)</p> <p>・ 5 モーラ形容詞 1 類 (2 5 ● ● ● ● †、3 9 ● ● ● ● †、4 0 ● ● ● ● †、6 9 ○ ● ● ● ○、6 3 ● ● ● ○ †)</p> <p>5 モーラ名詞 (8 0 ○ ○ ○ ● ○、5 2 ○ ○ ○ ● ○、○ ○ ● ● †、7 7 ○ ○ ● ● †、2 2 ○ ○ ○ ● †)</p> <p>5 モーラ一段活用動詞 2 類 (7 7 ○ ○ ● ● †、5 2 ○ ○ ● ● †、5 0 ○ ● ● ○ †)</p> <p>・ 5 モーラ形容詞 2 類 (7 8 ○ ○ ○ ● ○、3 6 ○ ○ ● ○ †、5 0 ○ ○ ● ○ †、○ ● ○ †)</p> <p>5 モーラ名詞 (5 4 ● ○ ○ ○ ○、1 9 ● ○ ○ ○ †、2 7 ● ○ ○ †)</p> <p>5 モーラ動詞 (4 3 ● ○ ○ ○ †、3 3 ● ○ ○ ○ †)</p> <p>・ 同形容詞 (5 4 ● ○ ○ ○ ○)</p>

6	a	(○●○○○○) (○●●●●●) (○●●●●●)	6モーラ名詞 (5 6 ○●○○○↑、4 7 ○●○○○↑、6 7 ○●●●●●、3 9 ●●●●●↑、6 1 ●●●●●↑、 ●●●●●↑、7 2 ○●●●●↑、4 8 ○ ●●●↑、6 3 ●●●●●○↑) 6モーラ動詞1類 (6 2 ●●●●●↑) ・6モーラ形容詞1類 (6 2 ●●●●●○ ↑、7 4 ○○●●●○↑、○○●●●○↑)
	b	(○○○●●●) (○○○●●●)	6モーラ名詞 (7 8 ○○○○●●●、7 7 ○○●●●○↑、5 2 ○○○●●○↑) 6モーラ動詞2類 (7 7 ○○○●●↑) ・6モーラ形容詞2類 (3 6 ○○○●○ ↑)
	c	(●○○○○○)	6モーラ名詞 (4 3 ●○○○↑、6 6 ●○○○↑) 6モーラ動詞・同形容詞 (5 4 ●○○○ ○↑)
7	a	(○●○○○○○) (○●●●●●) (○●●●●●)	7モーラ名詞 (5 6 ○●○○○○○↑) 7モーラ動詞1類 (7 3 ○●●●●↑) ・同形容詞1類
	b	(○○○●●●●) (○○○●●●●)	7モーラ名詞 (2 1 ○●○○↑) 7モーラ動詞2類・同形容詞2類
	c	(●○○○○○)	7モーラ名詞 (6 6 ●○○○○↑、4 3 ●○○○○↑) 7モーラ動詞・同形容詞
8	a	(○●○○○○○○) (○●●●●●●) (○●●●●●●)	8モーラ名詞 (7 1 ○●○○○○○↑、4 4 ○●●●●●↑、6 7 ○●●●●●↑) 8モーラ動詞1類 (○●●●●●↑)・ 同形容詞1類
	b	(○○○●●●●●) (○○○●●●●●)	8モーラ名詞 8モーラ動詞2類・同形容詞2類
	c	(●○○○○○○)	8モーラ名詞 8モーラ動詞・同形容詞

※「対応する名義抄式アクセントの調値」欄で()に入れて示したのは、その左に示した調値と条件異調値の関係に有るものである。そのうち、↑を付したものは、音韻変化によって語形が短縮したものである。

※「調値」欄で()に入れて示したのは、「現われてしかるべきであるが、実際には71種の調値中に見出だせないもの」である。見ての如く、その多くは、シラビームの長短を問題にしなければ右欄にそれと同一の調値を見出だし得るものである。6シラビーム以上の語についてそれが集中的に現われるのは、今婦仁村字与那嶺方言(を初めとする琉球諸方言)においてそうした長い語が種であることによる。

【上記処理の手順】

琉球諸方言のアクセント体系には、多くの場合、次のような性格が共通に認められるが、そのことは、この与那嶺方言のそれについても同様のようである。

- ① 名詞には甚だ多くのアクセント型 (= 調値。以下同様) が認められるが、
② 動詞のアクセント型は少なく、調類との関係が把握しやすい。

また、

- ③ 形容詞のアクセント型は、種類は少ないもののゆれが大きく、一型化する傾向にある。

といった性格も、諸方言に共通に認められるところであるが、与那嶺方言の場合にはこれは認められず、むしろ、形容詞のアクセント型が動詞のそれと同様に、調類との安定した関係を保っているといった傾向が認められる。

したがって、まず動詞・形容詞の調値～調類の関係を的確に把握するのが、アクセント体系全体の様相を把握の上で重要な作業となる。該関係については、『今帰仁方言辞典』634頁～685頁に示された<活用表>より、詳しく窺うことができる。即ち、

<A類>の動詞・形容詞の調値：語の第2シラビーム以後高。第2シラビームが無い場合には、第1シラビーム高。

<B類>の動詞・形容詞の調値：語の第4シラビーム以後高。第4シラビームが無い場合には、末尾シラビーム高。

(ただし、何らかの強調が加わる場合には語末が低められる傾向が有り、上がりめのシラビームのみを残して高部を低に変えた調値となる。また、終止形や命令形のように末尾シラビームが長い変化形の場合には、該シラビームを下降調として実現する。)

といった具合である。

以下に、参考のため、シラビームを分節単位として分析した変化形調値の一覧を、簡潔なかたちで示す。

I. 動詞<A類>

<活用形>	2 S 変	2 S	3 S	4 S	5 S
1・3	○●	○●	○●●	○●●●	○●●●●
2・4	○●□	○●□	○●○□	○●●●□	○●●●●□
5・7	○●※	○●	○●①	○●●①	○●●●①
6	○●	○●	○●○	○●○○	○●●○○
8	●■□	○●■□	○●●■□	○●●●■□	○●●●●■□
9 終止	●	○●	○●①	○●●①	○●●●①
10・11 ・14・17～20	●□	○●□	○●○□	○●●●□	○●●●●□
12	●■	○●■	○●●■	○●●●■	○●●●●■
13	●□□	○●□□	○●●□□	○●●●■□	○●●●●■□
16	●■	○●□	○●●□	○●●●□	○●●●●□
15・21 ・22	●□	○●□	○●●□	○●●●□	○●●●●□

2 3	○ ■	○ ■	○ ● □	○ ● ○ □	○ ● ○ ○ □
2 4 ~ 2 6	○ ■	○ ■	○ ● ■	○ ● ● ■	○ ● ● ● ■
2 7	○ ■ ■	○ ■ ■	○ ● ■ ■	○ ● ● ■ ■	○ ● ● ● ■ ■

※ 2 S 変の 7 形には、○●の調値も認められる。なお、表中の「S」はシラビーム数を示し、□■■■等は、付属語・付属形式を示す（詳しくは「一辞典」参照）。その調値は、○●等のそれに準ずる。以下同様。

II. 動詞 < B 類 >

1・3	○●	○●	○○●	○○○●	○○○●●
2・4	○○■	○○■	○○●□	○○○●□	○○○●●□
5・7	○●	○●	○○●	○○○●	○○○●●
6	○●※	○●※	○○●	○○○●	○○○●●
8	○■□	○○■□	○○●■□	○○○●■□	○○○●●■□
9 終止	●	○●	○○●	○○○●	○○○●●
10・11	○■	○○■	○○○●□	○○○●■	○○○●●■
14・17 ~ 20					
1 2	○■	○○■	○○●□□	○○○●■	○○○●●■
1 3	○■□	○○■□	○○●□□	○○○●■□	○○○●●■□
1 6	○■	○○■	○○●□	○○○●□	○○○●●□
15・21	○■	○○■	○○○■	○○○●■	○○○●●■
・2 2					
2 3	●□	●□	○○■	○○○●□	○○○●●□
2 4 ~ 2 6	●□	●□	○○■	○○○■	○○○●■
2 7	○□■	○□■	○○■ ■ ※	○○○■ ■	○○○●■ ■

※ 2 S 変・2 S の 6 形には、●○の調値も認められる。3 S の 2 7 形には、○○■□の調値も認められる。

III. 形容詞

変 化 形	< A 類 > 3 S	< B 類 > 3 S
1・2	○●●	○○●
3 ~ 5	○●○□	○○●□
6 ~ 8	○●●■	○○●□
9・10 終止・16	○●●	○○●
11 ~ 13・15	○●●□	○○●□
1 7	○●●■	○○●□
1 4	○●●	○○○
1 8 ~ 2 2	○●●■	○○○□

※ < A 類 > の調値については、「一辞典」前述の個所における記述が < B 類 > に対してのそれほど詳しくないので、本文部に見える < ~ プセン > の調値等を手がかりに、おおよそそのところを示しておいた。この点に関しては、なお、十分な検討を要する。

以上の如くである。動詞<B類> 2S変・2Sについては、末尾の-○を高として扱っているが、それは、それらが<A類>との混同を避けるためにやむなくそうした調値を取っているのであり、その本質において-●と何ら変わるところのないものと考えられるからである（なお、そのために、その高部は甚だ不安定で付属語・付属形式の方に移動しやすいものとなっており、結果的に、他のものよりも付属語・付属形式との結びつきが密接になっているようである）。

また、同<A類><B類>とも、23形～27形については、一見、上述の調値～調類関係に合致せぬように思える調値が現われているが、それらこそ、まさに変化部と付属語・付属形式との結びつきが緊密化し、ついに一語となるに至ったものであろうと思われる。詳しくは『一辞典』の挙例について見られたいが、その結果、それらの調値はそこに見るようなかたちとなったもので、調値～調類関係の基本規定に違反すると見なすべきものではない。

ところで、与那嶺方言には、他の琉球諸方言におけると同様、音韻変化によって形態のみならずアクセント型にも変化を来した語が少なからず認められる。それらの語のアクセント型は、上記Ⅰ～Ⅲの表に示した基本的なそれと条件異調値の関係に有るもので、次のように規定される。即ち、

<A類>の条件異調値：①語の第1シラビーム以後高（この場合、「語頭のシラビームが長」が条件）。

②語末を除く、語の第2シラビーム以後高（この場合、「本来4シラビーム以上の語で、語末とその直前のシラビームが長」が条件）。

③語末を除く、語の第1シラビーム以後高（この場合、「本来3シラビーム以上の語で、語頭・語末・語末直前のシラビームが長」が条件）。

<B類>の条件異調値：語末直前のシラビーム高（この場合、「本来4シラビーム以上の語で、語末とその直前のシラビーム、または語末とその二つ前のシラビームが長」が条件）。

この補助規定と前述の基本規定とによって、与那嶺方言の動詞・形容詞の調値～調類関係は、ほぼ必要十分に把握される。なお把握されずに残る若干のもののうち、15●○の類は、「第1シラビーム高」の規定により別の一類（「C類」？）として認めるのが適当なようであるが、さらに残るわずかのものについては、現在のところ全くの例外として疑問を呈しておく以外にない。今後なお検討を加えたいと思う。

次に、動詞・形容詞の調値～調類関係を参考に名詞のそれを見て行くと、下記の事が分かる。即ち、

(1) 名詞のアクセント型には種々のものが有るが、そのほとんど全てが、動詞・形容

詞について見られたのと同じのものである。

(2) それらのアクセント型は、次の弁別対 *minimal pair* の在り方に照らして、動詞・形容詞の場合と同様、基本的に三種の調類に分類させるべきものと思われる。

● p a a <葉> : ① p a a <歯> : ① p a a <外海>

● k i i <毛> : ① k i i <木> / ① d u u <竜> : ① d u u <洞> / ① k u u <今日> : ● k u u <九>

○ ● p a n a a <鼻> : ○ ① p a n a a <花> / ○ ① m a c i i <市場> : ● ① m a c i i <松> / ● ① h a g i i <蔭> : ○ ● h a g i i <欠席>

c f . ● s u N <為る> : ① s u N <来る> : ① s u N <してやる>

(3) 三種の調類とアクセント型との関係は、動詞・形容詞について見られた調値～調類関係の基本規定・補助規定(「C類」についてのそれを含む)を当てはめることで、明快に説明される。

これにより、動詞・形容詞の調値～調類関係と名詞のそれとが相等しい性格を持つこと、ならびに、それに基づき動詞・形容詞・名詞を一様に取り扱ってさしつかえないこと、が明らかとなる。

結局のところ、今婦仁村字与那嶺方言のアクセント体系は、動詞・形容詞・名詞について見た場合、「第2シラビーム以後高」云々の「高平調」・「第4シラビーム以後高」云々の「上昇調」・「第1シラビーム高」の「下降調」の三調類から成っていることが分かるのである(また、『一辞典』を一瞥したかぎりでは、副詞等のアクセント型もそれら各品詞のアクセント型に異なるところのないもので、「上昇調」に属するものと思われる?)。したがって、同方言は、シラビームを分節単位とする三型アクセントの方言と見なされる。

【余説】

以上のような手順により把握された三調類を、いわゆる名義抄式アクセントのそれと対比してみると、両者間に次のような関係の有ることが分かる。即ち、

「高平調」：1モーラ名詞1類・2類 / 2モーラ名詞1類・2類 / 3モーラ名詞形類ほか / 動詞1類 / 形容詞1類

「上昇調」：1モーラ名詞3類 / 2モーラ名詞3類 / 同4類・5類の一部 / 3モーラ名詞頭類・兎類ほか / 動詞2類 / 形容詞2類

「下降調」：2モーラ名詞4類・5類 / 同3類の一部 / 動詞3類

この事は、他の琉球諸方言との関わりにおいて大変重要な意味を持つことがらであるが、今回は紙幅の関係でそれに触れている余裕が無い。とりあえず事実のみを示して、爾後の考察を期したいと思う。諸賢の御教示を乞う。

【注】

1) 同書原文(651頁以下の「アクセントの型と語例」)に示されたアクセント型には(1)～(81)までの番号が打たれているが、実際にはそれを担う語例の見当らないものも有るので、71種となる。

2) 処理後の表に示さなかったアクセント型(23)(38)(60)等がそれである。いずれも、～tau・～miの形態を取り、調値は「語末シラビーム高」となる。同表には、他にも若干の調値を示していないが、それは次のような理由による。

(10)(34)：いずれも、語頭にmaa～<真～>の語構成要素を持つものであり、その形態とアクセント型①-との関係は一定しているように見えるが、それは、実際は挙例に関するかぎりのことであり、様相が把握しがたい。

(35)(51)(57)(65)(74)(75)：三調類に属するアクセント型のいずれかを持っていた語が語形変化を繰り返した結果生じたものと思われ、いずれも、「一辞典」本文の記述を具さに検討しても、形態・アクセント型ともにゆれが激しく様相を把握しがたい。

<擬態語・擬音語>：「一辞典」863頁以下に示された200余例のうちgaa-gaa等の反復語形を持つものについて、本文の記述を具さに検討し、次の結果を得た。仮A類○●●○：6例(3.0%) / 仮B類○①・○○●○等：124例(62.6%) / 仮C類①○・●○○○等：51例(25.8%) / その他：17例(8.9%)。仮B類調値・仮C類調値の両方を持つものが6例ほど示されているが、その両者は強調等の具合いで容易に交替しうるものようであり、実際にはもっと多く、全体として様相を把握しがたいものの如くである。

—鹿児島大学助教授—